

## 赤松小三郎・浅津富之助訳『英国歩兵練法』とその周辺(二)

日本英学史学会員 河元 由美子

赤松小三郎の名を題名とした刊本は至って少ない。最もよく知られている柴崎新一著『赤松小三郎先生』（信濃教育委員会編、1939年）と関良基著『赤松小三郎ともう一つの明治維新』（作品社、2015年）しかない。前者と後者の間には実に76年の隔りがある。兵制史や洋学史、英学史の世界では近代洋式兵法の紹介者として赤松小三郎の名は現れるが、人々の記憶に残るほど際立った存在とは言い難い。明治150年に当たり日本の近代化が多く論じられる中、赤松の名は時代に先駆けた議会制民主主義を堤唱した憲法論者として浮上り、赤松を主題とした研究論文や講演会などが増えつつある。マスメディアでも取り上げられる機会が多くなり、赤松の知名度は徐々に上がってきた。

「上田高等学校関東同窓会 赤松小三郎研究会」も地道な研究会を定期的に行き、回を重ねるごとに研究内容が充実してきている。また、上田の赤松小三郎顕彰会が『赤松小三郎先生』の復刻版出版に努力した功績は誠に偉大である。

個人的には赤松は新構想による建白書を幕府や有力開明派大名に提出した人物であることよりも、軍事書英訳を初めて世に出した人物として関心がある。それまでの洋書といえば蘭語、或いはほかの言語の蘭訳を翻訳したものばかりだったが、赤松は浅津富之助という下曾根塾の同輩と英書から直接翻訳を試みた。蘭語から英語へと移る過渡期の作品として彼らの訳した『英国歩兵練法』は大変注目されるべき書である。

昨年（2018年）10月例会で私は発表の機会をいただいたが、その時カバーできなかったいくつかの課題を本発表で述べてみたい。

### 1 『英国歩兵練法』研究書誌

『英国歩兵練法』（下曾根稽古場蔵版、慶応二年）の第二編と第四編（卷之一、卷之二、図完）を訳した浅津の出身地、現在の石川県の研究者の論文が出始めたのが1991年、1992年にかけてである。『石川郷土史学会会誌』24、25号に掲載された論文3点を紹介したい。

#### ① 今井 一良「浅津富之助と『英国歩兵練法』」『石川郷土史学会会誌』24号（1991）

今井氏は『日本英学編年史』（大槻如電原著・佐藤栄七増訂、1965）にも『洋学史事典』（日蘭学会編、1974）にも『英国歩兵練法』の訳者が赤松小三郎のみで浅津富之助の名がないに気づき、大変遺憾に思い調査を始めた。そして検索に努力し加賀藩前田家の文庫「尊經閣文庫目録」に『英国歩兵練法』五編八冊 赤松小三郎、浅津富之助訳 慶応元年とあるのを確認した。『日本洋学編年史』とその原著『新撰洋学史年表』、『赤松小三郎先生』（信濃教育委員会編）には慶応二丙寅年三月 江戸日本橋通二丁目山城屋佐兵衛発兌とある。

刊行年の不一致について氏は赤松・浅津が翻訳を分担し訳し終わると順次刊行された初版本（奥付なし）が慶応元年本で、のち全体の訳出が終わってこれを山城屋の発行にゆだねたものが再版本（奥付あり）で、慶応二年刊行と結論づけた。

初版本の刊行順は表紙見返しの刊記によると、第一編（赤松訳 慶応元年始夏[旧暦の四月]一下曾根信教の序文は仲夏[五月]）、第二編（浅津訳 慶応紀元孟秋[七月]）、第三編上、下（赤松訳 慶応乙丑仲秋[八月]）、第四編 卷一、卷二、図完（浅津訳 慶応紀元仲夏[五月]）、第五編（赤松訳 慶応乙丑孟冬[十月]）となり、これを順番に並べると① 第一編、② 第四編 卷一、卷二、図完、③ 第二編、④ 第三編上、下、⑤ 第五編（五編八冊）となる。

赤松の第一編は最初慶応元年の四月を予定していたが、実際は翌五月となり、浅津によって同五月に第四編、その二か月後の七月に浅津訳の第二編が刊行された。その後は赤松が訳述に復帰して第三編が八月に出、最後に第五編が刊行されたのが慶応元年の十月であった、ということになる。当時の出版物では、一冊で完成せず数巻に亘るものは、各巻末に奥付を付けず、最後の一冊だけに奥付を付けるのが普通であったようだ。次いで今井論文は浅津富之助の経歴について、赤松小三郎及び英学とのかかわりを中心として述べている。

浅津富之助（維新後は涉と改名）は、廃藩の後は南郷茂光と改めて明治新政府に出仕し、海軍主計大監を最後に退官、勅選貴族院議員、明治商業銀行取締役などを勤めた。

浅津は18歳の時江戸遊学、下曾根塾に入門、そのほか、村田蔵六や高島秋帆の塾でも学んでいる。軍艦操練所入学。江戸遊学は安政4、5年ごろで、赤松に遅れること5、6年の後である。

加賀藩は安政元年洋式武学校壮猶館を創立、3年には駿河の郷土出身佐野鼎を砲術師範として迎えている。佐野は2度にわたって欧米視察をなし、帰国後に加賀藩に提出したその外遊報告書類は加賀藩の海防施策に大いに貢献した。文久2年春、七尾に軍艦所が設けられ、藩は海外から軍艦購入を計り、手始めとして英国より求めた軍艦を「発機丸」と命名、加賀藩海軍艦艇の第一号となった。浅津は早くから軍艦所に入り、軍艦蒸気方棟取に任用されている。彼は主に蒸気が専門のエンジニアで、航海学もおさめている。

元治元年、浅津は勉学のため再び江戸へ出て軍艦操練所に再入学する。このころ赤松も江戸に出ており、横浜に往復して英国騎兵将校らと交わり英語を修練する傍ら再び下曾根塾に入った。『英国歩兵練法』の原書が下曾根から赤松に渡り、翻訳が始められたのは元治2年、即ち慶応元年である。今井氏の推測は赤松と浅津の翻訳分担は第四編卷一、卷二、図完（原書にある図版をまとめたもの）が浅津の翻訳、第二編は赤松の分担であったが、赤松の日記（『赤松小三郎先生』p. 63）に「四月十八日 御進発に付供を命ぜらる」「五月八日 英小隊の訳なる」とあるように、上田藩士が海路大坂に向かったのは五月二十八日であるから、赤松が第二編の翻訳に従事することは不可能であった。第一編の完訳が慶応元年仲夏、五月であったことが日記で証明される。第四編（浅津担当）が慶応元仲夏（五

月)で第二編が慶応紀元孟秋(七月)である。浅津訳の第四編は第一編とほぼ同じころには出来上がっていたとみられる。赤松の代わりに浅津が第二編を二か月で完訳、浅津の英語力がかなり高かったことがうかがえる。浅津は江戸で高島塾にいたころ、土佐藩の細川潤次郎(中浜万次郎より英語を習う)に英語の手ほどきを受けたという。横浜に軍艦を引き取りに佐野鼎に同行もしている、その際英人との接触も考えられ、ひいては英語力アップにもつながったのかもしれない。浅津は慶応2年帰藩し、藩軍艦「李白里丸」の機関修理監督を命じられた。同艦は長崎に回航修理に出されたが、この時同行藩士2名を長崎より英国に密航させている。翌年、「李白里丸」は暗礁に触れ艦底を破壊、再び長崎に修理に出されたが、この時長崎行きを命じられた浅津は9月帰藩することなく英国に留学している。英国滞在時の浅津の動向は不明。慶応4年幕府は瓦解、浅津が帰国した7月、江戸は東京なり、9月には明治という年号に変わった。浅津は明治4年に上京、明治政府出仕となり、上述の経歴を経て明治42年没している。

② 松島秀太郎「英国歩兵練法(初版)に関する考察」『石川郷土史学会会誌』24号(1991)

幕末、薩摩藩、佐賀藩など英式調練採用とともに兵書が必要となり、幕末から維新前後までに流布したいわゆる英国歩兵操典などの刊行は9点に及んでいる。大鳥圭介による『官版歩兵練法』(陸軍所 1864)をはじめ、赤松・浅津訳『英国歩兵練法』下曾根稽古場蔵版 1865(初版)高槻肇訳『英国歩操図解』(高槻肇蔵版 1866)、大鳥圭介訳『官版陣中要務』(和蘭軍務局編 1868)、平元秀次郎訳『英国尾栓銃練兵号令詞』(平元良蔵閣 1869)などがこれに続く。松島氏の『英国歩兵練法』初版の翻訳・刊行の経緯、概要は今井論文と同じで、各編の刊行順位を表にまとめている。次に現在所蔵されている所と内容も表にしており、それによると第一編から第五編までそろっているのは尊経閣文庫(東京、駒場)、豊橋市中央図書館、弘前市立図書館、福井市立図書館、山口大学図書館である。

関連刊行物としては、古屋作左衛門訳『千八百六十二年式「英国歩兵操練図解」上下』(1868)、号令を集めたものに、『英式操練「歩兵号令詞」』(銃隊方蔵 1867)、浅津涉訳『英国練法号令詞』(1869)が挙げられている。翻訳・刊行に関わった人として、下曾根信教、高島秋帆、九如斎(堀直虎)、平元範光(良蔵)、赤松小三郎、浅津富之助の略歴を説明している。

③ 松島秀太郎「翻訳 英国歩兵操典の刊行と推移」『石川郷土史学会会誌』25号(1992)

松島氏は原書 *Field Exercise and Evolutions of Infantry* の翻訳書が11種あることを紹介<sup>1</sup>、その概要(版元、原書年、翻訳者、刊行年、序または例言、校または編者、発兌元)を表にまとめている。刊行年だけ見ても、慶応元年<sup>ア</sup>(『英国歩兵練法』)から明治16年(石田五六郎訳『改定従軍練法』)にわたっており、原書改定年ごとに訳者名が記されている。明治期の訳者は陸軍省や海軍省軍人によるものである。原著が何年にもわたり刊行年ごとに様々な人によって翻訳されたことがわかる。

松島氏は上田市立博物館蔵の下曾根版第一編に散在する朱書きの訂正に気付き、それを薩摩版と比べることにより、重訂でこの訂正が生かされているかを調べた。以下例示する。

A(下曾根版)、B(下曾根版 朱書き)、C(薩摩版)とする。

例一 A 「業ニ熟セル長官ト下長一揃ニ」B 「種々ノ長官或ハ稽古長官、教師ト共ニ」C 「種々ノ長官或ハ稽古長官、教師ト共ニ」

例二 A 「銃無クシテ新兵小隊ヲ操練スル式」 B 「銃無キ新兵即チ隊列操練ノ式」 C 「銃無キ新兵即チ縦隊操練ノ式」 このように朱書きの部分は『重訂』に活かされているのがわかる。朱書きの主は不詳だが、赤松が重訂出版のために補正を書き入れたものと判断される。

英国における原書の改定は、訓練編成、機動力の向上進歩と戦争体験に基づき、採用する銃の変更によることが多いと思われる。翻訳書の目次も下曾根版と薩摩版は多少違う(青は下曾根、赤は薩摩)。第一編「新兵小隊操練の式(青)」、「新兵即チ隊列操練ノ式(赤)」, 第二編「中隊操練(青)」、「小隊操練式(赤)」, 第三編「筋入銃用ヒ方(青)」、「筋入銃用ヒ方(赤)」, 第四編「大隊編成及ヒ運動(青)」, 「一大隊の編成及ヒ運動(赤)」第五編「軽歩兵の式(青)」、「軽歩兵ノ式(赤)」, 第六編「龍隊即横隊編制及ヒ運動ノ式(赤)」, 第七編「要用ノ諸件(赤)」である。

松島論文には下曾根・薩摩両版の流布を津軽・酒田・仙台・加賀・越前・岡山・徳山・土佐・薩摩の諸藩とし、最初に出た下曾根版が最もよく読まれたようだとする。薩摩版は早くから英式を採用した薩藩の官板として、奥付にすべて「薩摩軍局」の朱印があり、配布を管理したようで、指揮を受けた翻訳者の赤松小三郎をも暗殺して幕府側での活動を阻止したと同様に、幕府側への流出を禁じていたと推測できる。赤松暗殺後、上田に戻された赤松の遺品の中に薩摩版がなかったのは、薩摩藩士が遺品整理のとき関与していたと推測される。最後のまとめで松島氏は原書の1859年、1861年、1864年、1865年、1869年、1870年、1882年の各版が日本に入っており、原書の改定を追ってそれぞれが翻訳されていると報告している。最後に、幕末から維新直後の英式採用、軍政改革はハードが先行し、ソフトは追いつかないまま、明治陸軍の仏式移行により英国歩兵操典は仏国歩兵操典に席を譲ったと結論する。

## 2 下曾根蔵版本(青本)と薩摩蔵版本(赤本)の比較—第二編と第四編を中心に—

青本(下曾根蔵版)の第二編、第四編は浅津翻訳であり、赤本(薩摩蔵版)は赤松の単独訳である。赤松は青本の第二、第四編の浅津訳をそのまま赤本に採用したのか、ということをも第二編、第四編夫々から同部分を対照させて検討してみる。参考までに第四編が先に出て、第二編が後だったことを考慮し、文体や表現も検討してみる。原書の company を浅津は「中隊」赤松は「小隊」と訳す。

表1

英国歩兵練法第二編(青本) 中隊操練 第一 中隊備用ノ兵士	英国歩兵練法第二編(赤本) 小隊操練 第一箇条 小隊を作ルヘキ銃卒ノ事
○前編ノ諸練法ヲ皆ク通学セル兵ラ是ヨリシテ中隊運動ノ法ヲ教授スヘシ 是大隊ノ直ニ続入スル為ノ前用意ナリ 且是カ為ニ二十八伍ヨリ二十伍ヲ編制シテ中隊ト号ス	○銃卒ノ是迄ノ学科ヲ残ラス精シク学ヒタラバ新ニ小隊ノ運動ヲ教ヘテ大隊ニ練入スルノ用意ト成ス 是カ為ニ二十八伍ヨリ二十伍マテヲ以テ一隊ヲ作りテ番数ヲ計ヘ分ツヘシ
第二 後列開ケ	第二箇条 列を開ク法
○[開列後列開ケ]ノ令ニテ諸士官ハ劔ヲ表シ且ツ「カピテン」ハ進ミテ右側ヨリ第二伍ノ前面ニ一歩至リ「リュテナント」併ニ「インサイン」ハ	○[開ケ]ノ令ニテ諸長官ハ劔ヲ揚ケ小隊長ハ進テ右ヨリ第二伍ノ前一步ニ立チ半隊長ト分隊長ハ小隊ノ左翼ヲ通りテ半隊長ハ小隊ノ左ヨリ第二

中隊ノ左側ヲ周り前列ヨリ一歩ヲ隔テ「リュテナント」ハ左側ヨリ第二伍ノ前面「インサイン」ハ中隊ノ中央ノ前面ニ到ルヘシ	伍ノ前分隊長ハ中央ノ前ニテ前列ヨリ一歩ニ立ツ
---	------------------------

表 2

英国歩兵練法第四編 卷之一	英国歩兵練法 上
第十二 散乱セル大隊ノ兵士ヲ聚集スルノ法 ○大隊兵士ノ散乱セルトキ或ハ混乱セルトキ是ヲ再ヒ聚集スルコトヲ屢施スヘシ 是ヲ成スニハ先ツ嚮導ノ右正面四分ノ一間隔ニ置キ敵ニ対シテ位定セシメ此如シテ喇叭ヲ以テ「集合」ノ暗号を成シ或ハ[嚮導ニ準ヘ中隊集レ]ト号令を成スヘシ 其令ニ隋リ各中隊第二編ノ総則ニ於テ記スル如ク各々其嚮導ニ準テ中隊を編成ス	第十二箇条 解体セル一大隊を集ムル法 ○大隊解体シテ在ルトキ或ハ混乱シタルトキ集ル業ヲ屢施スヘシ 此目的ニハ嚮導ヲ初メニ右正面四分ノ一距離ニテ敵ニ定メタル方ニ向キテ位定セシメ 其後喇叭ニテ[集合(エスセンプル)]ノ合図ヲ吹カシメ或ハ[嚮導ヘ集レ]ノ令ヲ下スヘシ此時各小隊其嚮導ニ準シテ隊ヲ作ル事第二編ノ総則ニ記ス如シ

表 3

英国歩兵練法第四編 卷之二	英国歩兵練法第四編 下
第三十三章 開キ縦隊ナリシテ或ル号セル中隊ニ準シ正面ニ戦隊ヲ編制スルノ法 [先頭中隊エ戦隊制レ] ○第一静止ヨリ先頭中隊エ準シ戦隊制スルノ法 ○右正面ナルトキハ予令ニテ諸「カピテイン」其則位ヲ変ス 先頭ノ嚮導及ヒ第一押伍卑官ハ其線点ヲ標示シ嚮導ハ其左側前面第一卑官其右側ノ前面ニ於テ両員共右向ヲ為スヘシ 「シニアルメチアル」ハ是ヲ整頓シ「アジュデント」ハ戦隊ノ距離側ヲ標示スヘシ	第三十三章 命セラレタル小隊ニ準シ開キ縦隊ヨリ正面ニ戦隊作ル事 [先キ小隊エ戦隊作レ] ○第一静止ヨリ先頭小隊エ準シ戦隊ヲ編制スルノ法 ○右正面ナルトキハ予令ニテ諸「カピテイン」(小隊長) 其則位ヲ変ス ○先頭小隊ノ嚮導及ヒ第一押伍卑官ハ其線点ヲ標示シ嚮導ハ其左側ノ前面第一卑官其右側ノ前面ニ於テ両員共右向キヲ為スヘシ 「シニアルメチアル」(右副将)ハ是ヲ整頓シ「アジュデント」(教頭)ハ戦隊ノ距離側ヲ標示スヘシ

表 1, 2, 3 に示す通り、赤松は青本（浅津訳）をそのまま用いるのではなく、自身の訳を行っているのがわかる。一見浅津訳は簡潔であるが赤松はひとつひとつ原文に忠実に、文体も整えて訳述しているように見える。第二編において浅津は英語の官名をそのままカタカナ語（「カピテイン、リュテナント、インサイン」）で記し、赤松は訳語（小隊長、半隊長、分隊長）を用いている。第四編においては赤松も官名をカタカナで記しているが、その官名の意味する語を右横に書き添えている（本文では「カピテイン」（小隊長）のように括弧内に其の官名を記した）。

### 3 絵図模写の検討

原書も翻訳書も 63 枚の絵図が収録されており、大別すると 3 種ある。①隊列や方陣を敷く際の

フォーメーション、運動の方向を示す図（非人物）、②人物像で静止の姿勢や運動の仕方を具体的に図示したもの、③喇叭吹奏のための楽譜に分けられる。原書のこれらの絵図を翻訳書（青本、赤本）と比較対照したところ、①と③はほぼ正確に模写されているが、②の人物像の模写となると、その正確さにおいて青本、赤本にいささかの違いが認められる。静止の姿勢を示す人物（一人の像を描いたもの）と楽譜の対比は前回の発表で示したので、ここでは複数の人物像を検討してみたい。第三篇下にあるこの絵図には4人の銃を持った兵士が描かれ<sup>2</sup>、騎兵隊に備える姿勢を表している。その部分の説明文を参考までに示すと、次のようになる。（図 第十七枚 騎ニ備へ構へ 騎兵ノ防キ方ノ事）

○銃ヲ持チタル隊ハ銃創ヲ着ケル銃ヲ肩ニ取リテ止リ立ツ所ヨリ此業ヲ始ム

○短キ銃ヲ持タル隊ハ銃ヲ提ケテ進ムトキハ此業ヲ始メ [止レ] 或ハ [止レ 右回りニ向ケー] ノ令ニシテ銃ヲ着ケル事ヲ教ユ 短キ銃ヲ持チタル縦隊ノ先ノ中隊ハ若シ止リタルトキハ他小隊ニ下ス [早足進メ] ノ令ニテ銃ヲ着クヘシ 又号令無クシテ止ル兵士ハ止リ次第ニ銃ヲ着クルモノナリ

○ [騎兵ニ備へー] 此予令ニテ第二列ハ九寸ノ歩ニテ一歩前ニ詰ル

○ [用意] 此令ニテ第一列ト第二列ハ直ニ前列ト後列ノ式ニテ管ヲ着ケル法ノ通り右ノ膝ヲ突き其時内金ヲ上ゲズシテ銃ノ台尻ヲ右ノ膝ノ内側ニ対シテ地ニ向ケ地板ヲ上ニ向ケ巢口ヲ斜メニ上ニ向ケテ銃槍ノ先ヲ大凡馬ノ鼻ノ高サニ成ス 左ノ手ハ下ノ帯金ノ直ニ上ニテ銃ヲ握リ右ノ手ハ台ヲ握リテ持チ左ノ腕ハ股ノ上ニ載セ膝ヨリ大凡六寸後ロニ在ルヘシ

○第三列第四列ハ打方用意ノ身構エヲナス

○銃ノ巢口ヲ上ニ傾ケテ内金ヲ上ケル事ナシ

青本の絵図は前二人の姿勢が原書よりやや傾きが少なく、後ろ二人の銃の構え方は原書の図より角度が上に向きすぎている。赤本の方はほぼ原書に近い。青本、赤本の模写に関わった職人の技術の差が感じられる。総じて赤本（『重訂英国歩兵練法』）の方が模写に関する限り非常に原書に忠実だと感じる。

## まとめ

本発表では先学たちの研究書誌を紹介し、第二編、第四編を中心に浅津訳と赤松訳を同部分の例を示しながら文体や語句の使い方を対比検討し、最後に図版の模写の正確さを原書、青本、赤本で検討してみた。研究書誌からは原書の翻訳歴や翻訳に携わった人の多様さから原書が長く日本の陸軍歩兵教則本として使用されたことが分かった。また『英国歩兵練法』がどの藩に流布されたかも明らかになった。青本に付された朱書きが赤本に活かされていることはもっと具体例がほしい。図版の模写については赤本（薩摩蔵版）の方がより鮮明で正確である印象が強い。管見したところ総じて薩摩蔵版の方が印刷が鮮明で保存状態がきわめてよいものが多いと言える。赤松と浅津の『英国歩兵練法』翻訳に対する姿勢もその翻訳文からうかがえる。全くの私見ではあるが、赤松にとってこの翻訳はライフワークのような大きくて重い存在であり、その翻訳態度も几帳面、生真面目さが忠実な訳述に現れており、いわば「静」の学者タイプ、浅津にとって同書は彼の英語の才を活かした翻訳作業で、彼の経歴が示す如く、本人は蒸気学、航海学を専門とする武人、「動」の人と感じる。赤松が生きていたらさらに英書からの翻訳に専念しただろうと思う。